

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494



国連軍縮週間と第五福竜丸

庄野直美

第二次世界大戦が日本の敗戦で終了して間もなく、一九四五年十月二十四日、平和な新世界秩序の建設をめざして国際連合(国連)が設立されました。そして一九七八年六月の第一回国連軍縮特別総会において、毎年十月二十四日から一週間を「国連軍縮週間」とすることが、申し合われました。世界各地において毎年この週間に、軍縮とくに核軍縮の実現のために、思いと行動を新たにしようという約束です。非政府組織の代表も含めて、このことを誓い合った一九七八年というのは、世界の核体系が現状の姿まで決定的に悪化して来た頃でした。

すなわちアメリカとソ連は、原爆・水爆・大陸間ミサイル・潜水艦発射ミサイル・多弾頭ミサイル・巡航ミサイルなどを総て開発し終った頃でした。イギリス、フランス、中国の核兵器体系も、その程度は米・ソに及ばないといわれています。これら五大国を含んだ全面核戦争が起これば、人類は確実に滅

亡するといふ切迫した危機感が、第一回国連軍縮特別総会を開催させたのです。しかもその開催を積極的に推進したのは、非同盟諸国と発展途上国でした。

そもそも、このような状況になった最大の原因は、社会体制の違いに基づく米・ソ間の敵意と対立です。第二次大戦中に両国が手を結んだのは、共同の敵ドイツ・イタリア・日本に対抗するためで、広島・長崎への原爆投下の原因には、戦後の米・ソ対立を予想したアメリカがあらかじめソ連を威圧しておきたい、という政治的動機も含まれていました。広島・長崎は、米・ソの政治的闘争の犠牲になったと言えます。

戦後一九四六年一月に発足した国連原子力委員会では、原爆問題の討議が始められました。しかし、ソ連への強い不信感からアメリカは、国連の討議のかたわらで原爆実験を強行していき、一九四九年八月に原爆を所有しました。

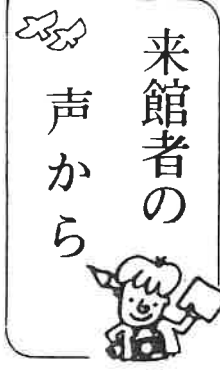
そこでアメリカが今度は水爆の開発を始め、一九五二年十一月、その実験に成功しました。再びこれに対抗したソ連は、その翌年の八月に水爆実験を成功させ、いよいよここに本格的な米・ソの核軍拡競争が始まったのです。但しこれらの水爆は、まだ実用兵器とはいえないものでした。

本格的な水爆の実験は、一九五四年三月一日、アメリカがビキニ環礁で行った3F爆弾で、その威力は広島原爆の千倍にも相当する約一五メガトンでした。この時、実験地の東方約一六〇キロの海上で被爆したのが、日本の第五福竜丸です。

歴史の皮肉と言いましようか、わたしたち日本人は、広島・長崎・第五福竜丸を通して、原爆と水爆の出現という不吉な核時代を画する大事件を経験したわけです。しかも何れも、米・ソ対立に深くかかわっています。

わたしたちは今こそ、全く新しい考え方によって、社会体制・思想・信仰などの多様性を認め合いながら、共存共生の新世界を追求する以外にありません。これが、国連軍縮週間・広島長崎・第五福竜丸の意味であると思います。

(広島女学院大学教授)



来館者の声から

今この展示館の中に入り、こう感じました。それで詩を書きます。船は何も言わないけれど、そのふるくなった体がこう語っている。

「戦争はいらない、かくもいらぬ、必要なのは平和だ」

五〇円募金します(江東区四砂中ひさし 陸上部員)。

久しぶりに館内拝観させていただき、感が深い思いです(江東区婦人問題協議会で七〇名参加)。

人間はたいがいなくならなまき平和はこないネキッ... *

そんなことはない。人間が作り出したのだから、人間がなくなさなければね(大田区 堀井)。

死の灰をかぶるということが、どんなに大変かわかりました(和歌山県海南市東海南中三年 山門)

だいがふくりゅうまるをみたとき、なぜか人のたましいをかんだ。ばくはつがとうきょうのどまんなかにあのばくだんがきたら、日本はもうおわりじゃないかと思った。

わたしは戦争がこんなにこわいものだと初めてしりました。わたしのおじいちゃんも戦争で死んでおばあちゃんのかなしい気持ちがよくわかります。本当にもう戦争なんかこないほうがいい(足立区 平野小 工藤美保)。

永遠に平和でありますように(東京ガス千葉支社 横川武)。

千葉市より 東京ガス ちづこ)。

今、やっと核兵器に対する動きが少しずつではあるけれど一歩一歩でも進んで来た。

今まで戦争について知ったこと、ここで学んだことを心に残し、平和への道を切り開いていきたい(新座総合青少年赤十字 高橋琢哉)

宿題できたのですが、本心が痛い。行動には移せないけど平和を思うだけでもいいですよね(氏)。

「メリケン粉だと思ってなめてみたら、苦かった」と死の灰を語る老女の言葉が、以前見た映画以来、ずっと頭に残っている。私にとって、心にずっとずっととひっかかり続けるものが、いくつもあることは、自分で気付いているが、それが何であるかはなかなか見えてこない。しかし、今日初めてここへやって来たことは、何であるか確かめる一つの材料になるように思う。今自分が何をすべきなのか直接には結びつかなくとも、私の中のどこかで、つながるはずだから。

新聞の色に、年月のうつりかわりを感じさせられた(坂根京子)。

編集後記

▼食品衛生監視員として、ビキニ事件当時、築地で放射能検査を担当した、元都衛生局の山崎英也氏の話の伺う機会があった。山崎氏の話は「獣医衛生課」という聞き慣れない地味な裏方的な仕事を知る、興味深いものであった。ビキニ事件に関する話は別の機会にご紹介したいと思うが、次のような話を下された。「三十年から狂犬病がありませんが、それをなくすため、四人の犠牲者が出ている。その内のひとりは今でも社会復帰出来なくて、松沢病院に入院している」。こうしたこともだんだん忘れられていくという。記憶の一端にとどめておきたいと思った▼空調工事のため、十二月中旬まで暖房がストップ。毎年、夢の島の冬には悩まされます(は)。



● 100万人参観者運動を!

86年10月	来館者数	8,196名
通算1カ月	平均来館者数	5,443名
当月1日	平均来館者数	304名
通算	来館者数	680,319名

て、市長とビキニ評議会の委員にたいして、試料についてセシウム含有量が調べられることになる」と説明した。

「土に塩水をどつと流すことによつてセシウムのいくらかをとりぞくことができるかも知れない。われわれはそれを実験している」。彼はそう語り、ビキニの人たちはきいているだけではないと言わなかつた。

水地質学者であるハワイ大学のフランク・L・ピーターソン博士、フロリダ大学の土壌科学の臨時教授アーノ・L・ストーン博士、ヴァージニア・マクリーンのBDM会社の核・土木技師アーサー・S・クボ博士やビキニ環境復元委員会(BARC)の全委員もいて、全員、島の汚染をとり除くために活発に仕事をしてきた。

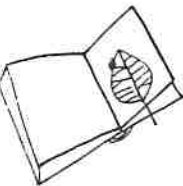
科学者たちはビキニの人びとの幸福のために深い心配の気持を分かち合っていた。しかし過去のごまかし、矛盾、混乱はビキニの人びとの信頼感をむしばんでしまつた。

とうとうキロン・パウノは口に出した。「われわれはこれらの実験について本当にはわからない。

われわれが理解していることはただひとつ、あなた方がわれわれの島に毒を入れたこと、わたしは年老いておりもう何年も生きられないことである。だから、われわれが言いたいのは、われわれをキリ(現在の居住地)から逃がれさせてほしい、ビキニが安全になるまで安楽に生活できるように沢山のお金をあたえてほしい、ということだけだ」。

科学者たちの感情を害さないように、もう一人のビキニ人がつけ加えた。「なるほど、われわれはあなたがたの仕事を理解していません。しかし、われわれは、あなた方、アメリカ人がたいへん利口なことを知っている」。

※『ナショナル・ジオグラフィック』誌—アメリカで発行されている人文地理・人類学分野の啓蒙雑誌で、長い歴史をもち、発行部数が多く、きれいな写真がのることで有名。



賛助会員の拡大、理事会の強化など討議

第五福竜丸平和協会第73回理事会が九月二十九日、東京・学士会館で開かれ、理事の拡充を含む理事会の強化などを決定した。開館十周年を迎え増大する展示館の役割に対応し、協会の事業の一層の充実をめざすもので、賛助会員の拡大も決意。この間新たに20人の個人・団体の入会があったことが報告され、さらに努力を強めることになった。

展示館の空調施設改修 工事はじまる

「船が修理されたのに空調設備が古くては」と船の保存・維持のためにその改善が要求されていたが、十月一日、年末までの予定で工事がはじまった。よりよい条件をと機械を新鋭のものにいかえ、温冷風の吹き出し口も増設するもので、いま配管工事中。五〇センチも掘れば、埋立のビニールのゴミなど統出で、なかなかの大工事である。

夢がふくらんだフィールド・ワーク 和光中学校見学

核時代に生きる—その大きなテーマに挑んでフィールドワーク

を続ける東京町田の和光中学校二年生約五〇人が、十月九日、横田・横須賀、原子炉の調査を経て、展示館を見学。じつくりと船・パネルを見つめ、元乗組員大石又七さんの話を聞いた。

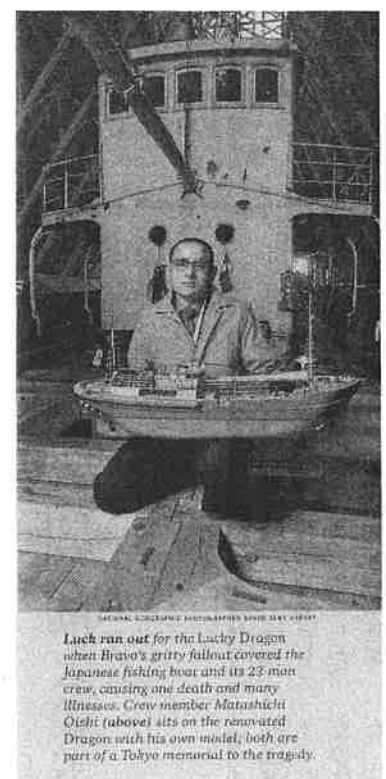
「毎日、いつ死ぬのかと思った」被災から入院、苦悩と不安の生活、30年のいまの思い、未来への願い—静かな大石さんの話にひきこまれた後は、中学生らしく質問続出。「船長さんや他の人の話も聞きたいけどどうしよう」「船を守つた人にも会いたくないなあ」「太平洋の人たちだって」。夢は大きくふくらんでいった。

函館水産高校生も

十月二十一日、「訪日ソ連産業施設団」の一行九〇人が展示館を見学。日ソ協会東京都支部連合会が窓口になり、秋晴れの東京湾晴海埠頭から展示館、木場、湾内を廻った。

北海道からの見学はめずらしいが十月二十五日、函館水産高校生百五〇人が修学旅行で来館。いわし巻き網漁の実習をやったばかり、卒業したらマグロ船に乗る」と未来の漁師が目を見つめた。

A Way of Life Lost BIKINI



Luck ran out for the Lucky Dragon when Bravo's gritty fallout covered the Japanese fishing boat and its 23-man crew, causing one death and many illnesses. Crew member Matashichi Oishi (above) sits on the renovated Dragon with his own model, both are part of a Tokyo memorial to the tragedy.

『ナショナル・ジオグラフィック』誌本年六月号に「生活が失われた一つのやり方—ビキニ」という表題で、シニアライターのウイリアム・S・エリス氏による二十二ページの報告と写真が掲載されているが、第五福竜丸についても言及され、元乗組員大石又七さんが改修なった当展示館の船のデッキで御自身でつくられた模型船をもつて坐っている一葉の写真が紹介されている。

写真(同誌写真家デービッド・アラン・ハーヴェイ氏撮影)の説明文はつぎのようになっている。「ブラボーのじやりじやりしたフォールアウトが日本の漁船とその二十三名の乗組員をおおひ、一名を死にいたらしめ多数に被害をもたらしたとき、ラッキードラゴンにとつて幸運は終わった。乗組員大石又七さんは彼自身のつくった模型をもつて改修されたドラゴンの上に乗っている。改修されたドラゴンも模型も両方とも悲劇的事件にたいする東京の記念館の一部である」。

以下に、報告の一部を紹介する。(川崎 昭一郎)

年は一九四六年。第二次世界大戦は、その發明者さえ完全には理解しなかつた原爆の狂暴なフラッシュの中で終わったばかりであった。実験をさらにつづけるためアメリカ軍は、ビキニ環礁とよばれる太平洋の遠い島群を選んだ。住民たちは、実験が終わりたい帰れると保証されて、家から立退くことに同意した。四十年がたち、二十三年の核実験が行なわれた今日、ビキニの人たちはなお、家から五百マイルはなれた、狭苦しい隔離された島で待ちつづけている。ビキニにおかれた測定器が示しているように、彼らの環礁はまだ放射能で危険だからである。

ビキニが実験場に選ばれた理由は、海上路と航空路からへだたっており、また、環礁での風が予測可能な方向に吹き放射能雲の流れを制御できると考えられたからである。しかし、たった一度だけであつたが、その実験での爆発時に風向きが変わり、そのためにビキニの人びとは四十年後も放浪状態におかれている。

ブラボーは運搬可能な水爆の最初の実験であつた。それは約十五メガトン、TNT火薬千五百万ト

ン相当の爆発(広島原爆はTNT一万五千トン)であり、アメリカがこれまでに試みた最強有力兵器であつた。ブラボーに相当するTNTを運ぶ貨物輸送車は北米大陸にかかる長さになる。

誤つた風は、放射能をもつた粉状になつたさんごやその他の物質を、五万平方マイルにも及ぶ広大な範囲にふりまいた。フォールアウトを浴びた人びとのなかには、ロンゲラップとウトリックの島の約二百五十人のマーシャル人、ロンゲリックの二十八名の測候所員、日本の漁船、第五福竜丸(ラッキードラゴンNo.5)の二十三名の乗組員が含まれ、二十三名のうち一名は放射能をあびて死亡した。

このような爆発力がなかったら、また北向きから東向きへの風変化がなかったら、ロビンソンは三十一年後ビキニの土にひざまづきながら、実験庭園で栽培された野菜やその他の作物の検査をするようなことにはならなかつたであろう。一つの庭園では放射能汚染のつよい表層土をとり除いたうえで行なわれ、もう一つの庭園では土はそのまま肥料が散布された。ロビンソンは立ちあがり明るい日光に目を細め